

Protistology Newsletter

April, 2017

日本原生生物学会会報 (No. 32)

URL: <http://protistology.jp/>

[第 50 回大会 \(つくば\) のご案内 \(第 1 報\)](#)

[第 49 回大会 \(岡山\) 報告](#)

[学会賞 受賞者コメント](#)

[教育賞 受賞者コメント](#)

[奨励賞 受賞者コメント](#)

[BPA 受賞者コメント](#)

[原生物学関連の学会等開催情報](#)

[学会活性化委員会からのお知らせ](#)

[日本分類学会連合 第 16 回総会 報告](#)

[若手の会 通信](#)

[事務局からのお知らせ](#)

[編集委員会からのお知らせ](#)

第 50 回 日本原生生物学会大会 (つくば) のご案内 (第 1 報)

大会長 沼田 治 (筑波大学)

第 50 回 日本原生生物学会大会は、下記の日程で筑波大学・筑波キャンパスにおいて開催されます。日本共生生物学会の第 1 回大会とのジョイント大会となります。日本共生生物学会には原生生物の共生関係と寄生関係、菌類と寄生虫関係、植物の根粒細菌関係、オルガネラ関係、寄生性昆虫、シロアリ、腸内フローラなどの研究者が参加します。大会では本学会と日本共生生物学会のジョイントシンポジウムを企画しております。

11 月中旬の筑波は、例年、晴天に恵まれ平均気温は 10℃ 前後です。キャンパス内の木々の紅葉が美しくなる季節です。是非お越しください。

1. 会期

平成 29 年 11 月 17 日 (金) , 18 日 (土) , 19 日 (日)

11 月 17 日 (金) : 評議員会, 編集委員会, 若手の会, 若手の会・評議員会 合同懇親会

11 月 18 日 (土) : 大会第 1 日, 総会, 懇親会

11 月 19 日 (日) : 大会第 2 日, シンポジウム

※ 上記予定については今後追加・変更する場合があります。その場合は学会ホームページ、および、学会大会ホームページ (現在準備中です) にて随時皆様にお知らせいたします。

2. 会場

筑波大学・筑波キャンパス中地区第 2 エリア 2C 棟, 2B 棟
(筑波大学アクセスマップ: http://www.tsukuba.ac.jp/access/map_central.html)

評議員会: 2C 412-1

編集委員会: 2C 412-2

若手の会: 2C 401

総会・発表会場: 2B 412, 2B 411 (予備室)

ポスター会場: 2B 206-209

懇親会: 2B 棟 食堂

若手の会・評議員会合同懇親会: 2B 棟 食堂

3. 発表形式

液晶プロジェクターを用いた口頭発表、およびポスター発表。
※ 発表演題数により、発表方法の変更をお願いする場合があります。

4. 参加申し込み

要旨提出締め切りおよび事前参加申し込み締め切りは、**2017 年 9 月 17 日 (日)** (予定) です。申し込みの詳細等は次号のニューズレターでお知らせいたします。

5. 大会参加費等

大会参加費等は、**当日受付にてお支払いください**。当日参加も受け付けますが、準備の都合上、できる限り事前の申し込みをお願いいたします。

大会参加費 : 一般会員 3,000 円 学生会員 1,000 円

事前登録以後 一般会員 4,000 円 学生会員 1,000 円

懇親会費 (予定) : 一般会員 4,000 円 学生会員 2,000 円

昼食：学食以外にラーメン屋，カレー屋，麺類の店，定食の店，カフェテラスなどが利用できません。（19日は日曜のため食堂はお休みとなります。19日の昼食は周辺の食堂マップを準備するとともに，お弁当などを手配する予定です。）

6. 宿泊

つくば駅周辺，研究学園駅周辺に各種ホテルがありますので，各自でご予約ください。

7. アクセス

下記 URL をご覧ください。

http://www.tsukuba.ac.jp/access/tsukuba_access.html#fromcenter

筑波大学の中地区第2エリアには，つくばセンターバス乗り場6番より「筑波大学循環バス（右回り，左回り）」あるいは「筑波大学中央」をご利用いただき，筑波大学中央で下車してください。バス停から会場までは徒歩5分程です。

8. 大会事務局

〒305-8572 つくば市天王台1-1-1

筑波大学生命環境系 生命環境科学研究科生物科学専攻

第50回日本原生生物学会 大会事務局 沼田 治

TEL : 029-853-6648

FAX : 029-853-6614

E-mail : numata.osamu.gb@u.tsukuba.ac.jp

第49回日本原生生物学会大会（岡山）のご報告

大会長 安藤 元紀（岡山大学）

日本原生生物学会第49回大会は，2016年10月8日（土）から10月10日（月）までの3日間，岡山大学（津島キャンパス）で開催されました。過去に中国地方で開催された本大会の歴史を紐解いてみますと，第3，15，29，46回の広島，第21，37回の山口について，本大会が7回目，また岡山では初めての開催となりました。本大会参加者は，本学会員62名（一般43名，学生19名）に加えまして，学校教員・生徒11名，さらに若手の会主催のイベント参加者24名，合わせて97名の方にご参加いただきました。一般講演につきましては，口頭発表19題，ポスター発表13題について活発な議論がなされました。大会一日目に若手の会シンポジウムとして3人のシンポジストによる「原生生物のフシギ」が開催され，二日目には大会シンポジウムとして6人のシンポジストによる「原生生物学の進展と理科教育への可能性」が開催されました。総会では，日本原生生物学会・学会賞に小林 富美恵 会員（杏林大学），教育賞に楠岡 泰 会員（琵琶湖博物館），奨励賞に末友 靖隆 会員（岩国市マイクロ生物館）の受賞の報告がなされ，総会后および大会最終日の午後に受賞記念講演として，小林 会員による「マラリア原虫感染に対する宿主免疫機構」，楠岡 会員による「微小生物の魅力を伝える琵琶湖博物館」，末友 会員による「原生生物の認知度向上と教育分野への利活用」が行われました。学会賞3賞すべての受賞者がそろった初めての大会となりました。同じく大会最終日には，本学会若手の会員を対象としたベストプレゼンテーション賞（BPA）の授賞式を行いました。今年度は，内之宮 光紀 会員（理化学研究所）の「キイロタマホコリカビにおける柄/胞子分化および他系統認識の進化の理論研究」と島田 真帆 会員（大阪府立豊中高等学校）の「スピロストラムにおける再生」が選ばれました。



大会長 安藤 元紀 先生

本大会の特徴としましては，岡山県・市の教育委員会のご後援をいただき，学校教員・生徒の方々を全日程無料で参加可能としたことが挙げられます。大会開催二日前の10月6日付の読売新聞 朝刊にて本大会の紹介記事を掲載していただ



大会会場 岡山大学・津島キャンパス



一般講演



ポスター発表

きました。大会初日の若手の会主催のイベントでは一般の方、学校教員・生徒のみなさんを含めて、たくさんの方々にご参加いただきました。新聞記事を見て参加したという親子のご参加もありました。また、大会シンポジウムでは「原生生物学の進展と理科教育への可能性」と題して、原生生物学と理科教育学の第一線でご活躍の方々をシンポジストとしてお招きし、学会員および学校教員の皆さまとともに議論を深めることができました。原生生物学の最先端の研究動向から、学習指導要領とそこで取り扱われている教材としての原生生物の位置づけ、スーパーサイエンスハイスクールに代表される高大連携あるいは高大接続に向けた取り組みの紹介とその中の原生生物の取り扱いについて、本学会で過去に発表された演題内容と学習指導要領で取り上げられている教科内容との相関について、そして原生生物の魅力に取りつかれた一般の人々を含めた裾野の広い原生生物学のコミュニティーを形成していくことの重要性について等々、幅広い内容の議論を通じて本学会の現状分析がなされ、それに付随する様々な問題点も浮き彫りになったのではないかと考えております。本シンポジウムをきっかけとして、本学会と学校教育を繋げていくための方策について今後も継続して議論がなされていくことになれば望外の喜びです。ご登壇いただきましたシンポジストの皆さま、ならびに非常に多岐にわたる内容にも関わらず座長としての的確な議事進行と包括的な視点から重要なコメントをいただきました芳賀 信幸 会員には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本大会につきましては、学会長、学会事務局、大会実行委員会のおよそ半年間のご支援のもと、また岡山県・市の教育委員会、おかやま観光コンベンション協会のご後援のもと、成功裏に終えることができました。ご協力いただきました多くの皆様に改めまして厚く御礼申し上げます。また、本大会は主催研究室の学生スタッフ全員の活躍に支えられてなんとか無事に実施することができました。学部や大学院の授業・教育実習の合間を縫っての、大会 HP・オリジナルポスターの作成、大会運営マニュアルの検討、若手の会との連携、会場設営等々、大会準備に奔走してくれました。大会最終日の早朝には、中心的に活躍してくれた院生さんの第一子誕生というおめでたい一報もあり、本大会の運営をお引き受けしてほんとうによかったなど大会終了間際にしみじみと感じておりました。主催研究室の学部生・院生 諸君、そして遠方から駆けつけてくれた卒業生・修了生 諸氏に感謝いたします。

最後に、第 49 回大会として引き継いできましたバトンを、本学会のこれまでの半世紀にわたる活動を称える記念すべき第 50 回大会（筑波大学）にお渡しいたします。そして、本学会の次の半世紀に向けての第一歩目の場所で会員の皆さまとお会いできますことを楽しみにしております。



原生生物フェスティバル



大会シンポジウム



大会懇親会



大会スタッフと沼田 治 学会長



岡山大会 参加者一同

平成 28 年度 学会賞 受賞者コメント

小林 富美恵（杏林大学）

この度は、「日本原生生物学会賞」という名誉ある賞を戴きまして、誠に光栄に存じます。対象となった研究テーマ「マラリア原虫感染に対する宿主免疫機構」に関し、ご推薦戴いた沼田治会長並びに評価して下さいました選考委員の先生方に深く感謝申し上げます。

私は、以前、寄生蠕虫類の日本住血吸虫を専門としておりましたが、寄生虫免疫学を深く学ぶため、当時、マウスマラリアモデルを用いたマラリア免疫研究の第一人者だった William P. Weidanz 教授のラボに留学しました。1990 年代に帰国した後は研究のターゲットをマラリア原虫に絞り、寄生虫と宿主それぞれの生き残り戦術を探っていくことにしました。

マラリア原虫が感染すると、宿主には様々な免疫応答が惹起されます。私達は、まず、強毒株マラリア原虫が宿主体内で生き延びるための戦略は、宿主に強い抑制性サイトカイン (IL-10) 応答を惹起させることであることを突き止めました。一方、弱毒株原虫感染ではこうした強い抑制性の免疫応答は起こりませんでした。弱毒株原虫は宿主に防御免疫応答を惹起させる抗原を有し、弱毒株原虫が感染したマウスでは、CD4 陽性 T 細胞、特に Th1 細胞が強く応答し感染防御に関与することを明らかにしました。一方、私達は、*Plasmodium berghei* XAT 株が、それまでマラリア防御免疫応答の研究に繁用されていた *P. yoelii* や *P. chabaudi* と異なり、宿主に細胞性免疫と体液性免疫の両方を惹起することから（ヒトにおける応答に近い）マラリアにおける防御機構を解明するモデルとして優れていることを見出しました。嬉しいことに、本原虫を用いて宿主の自然免疫様細胞の 1 つである $\gamma\delta$ T 細胞のマラリア原虫感染における役割を明らかにすることができ (Kobayashi et al, Exp Parasitol, 2007; Inoue et al, PNAS 2012; Inoue et al, FEBS Lett 2014) , 研究はさらに進展しています。

原生動物学会（当時）に加入したのはマラリア研究を開始した頃ですので、会員歴は 20 年超です。私が入会した頃は、寄生性原生動物(原虫)と自由生活性原生生物に関する研究発表がほぼ半数ずつでしたが、次第に寄生虫畑からの発表が少なくなり、一時は寄生虫畑の先生方が絶滅危惧種状態になりました。しかし、近年は演題も増加の兆しを見せており、歴代の学会活性化委員会の先生方のご苦勞が実を結び始めているようです。私も微力ながら原生生物学会と寄生虫学会の架け橋となるよう、努力して行きたいと思っています。



受賞者と沼田 治 学会長 (右)

平成 28 年度 教育賞 受賞者コメント

楠岡 泰（滋賀県立琵琶湖博物館）

この度は日本原生生物学会教育賞、しかも初めての受賞者に選考していただき、誠に光栄に存じます。推薦して下さった洲崎敏伸先生、末友靖隆先生、春本晃江先生、並びに選考委員の先生方に御礼申し上げます。この賞は私個人だけでなく、琵琶湖博物館がこれまで行ってきた微小生物の世界を一般の方に伝える活動に対していただいたものと考えております。

小学生のころ、顕微鏡で初めて水槽の中のアオミドロとケンミジンコを観察したとき、何かぞくぞくするものを感じました。そして、それ以来ミクロの世界に魅了されています。修士課程でアメーバ、博士課程で繊毛虫のツリガネムシの生態を研究し、琵琶湖博物館の準備室に職を得ることができました。展示や観察会などのプログラムを一から企画するチャンスに恵まれ、微小生物の魅力を紹介する活動ができないか考えてきました。1996 年の開館当初の展示では、毎朝琵琶湖から採集してきた生きたプランクトンを実体顕微鏡で観察して、その名前を検索できるコーナーを作りました。また、「ミクロの世界」というコーナーでは動くプランクトンを疑似立体映像装置の箱の中に映し出し、箱の窓から手を入れてプランクトンを触ろうとしても、手は宙を切ってしまうという展示もありました。琵琶湖博物館の特徴の一つに体験的なプログラムをあげること



受賞者と沼田 治 学会長 (右)

ができます。小学生にも大学の実習で使うような実体顕微鏡と生物顕微鏡を使ってもらおうと、それぞれ 20 台ずつ揃えました。学校の先生が“顕微鏡ってこんなに良く見えるものだと知りませんでした！”と言ってくれます。体験学習プログラム「プランクトンの観察」は人気メニューで、年間千人以上の方がこのプログラムを受けます。そのほかに「プランクトンビンゴ」、「プランクトンネットを作ってプランクトン観察」なども実施しております。また、琵琶湖博物館の利用者団体「はしかけ」の「びわたん」メンバーと一緒に「プランクトンの模型作り」、「プランクトンのぱらぱらマンガ」、「顕微鏡を作ってプランクトン観察」などのプログラムを開発しました。

2016 年 7 月マイクロアクアリウムという微小生物に特化した展示室ができました。研究者と美大の芸術家がコラボして造ったアート作品をはじめ、肉眼で微小生物を見ることができるミニ水槽や、カウンターにずらりと並んだ顕微鏡を使って観察ができるマイクロバーがあります。マイクロシアターではプランクトンをモチーフにした椅子に座りながら、大きなスクリーンでミクロの世界に浸ることもできます。皆様も是非琵琶湖博物館にお越しください。



マイクロアクアリウム入口にある
美大生制作のオブジェおよびレリーフ

平成 28 年度 奨励賞 受賞者コメント

この度は、名誉ある日本原生生物学会奨励賞を頂き大変光栄に存じます。この場をお借りして、ご推薦頂いた春本先生、元指導教官の洲崎先生、歴代会長を始めとする日本原生生物学会の先生方、そして選考委員の先生方に対し、心から御礼申し上げます。

平成 17 年夏に誕生した当館は、県下第一の清流錦川と自然豊かな山々、瀬戸内海という岩国が持つ地の利、原生生物が秘める様々な魅力、それに日本原生生物学会を始めとする全国の専門機関との連携が生み出す「ローコストでハイレベルな科学教育」を軸に、1) いつでも誰でも無料で原生生物と触れ合える常設展示、2) 五感で学べる体感型理科教育プログラムの開発、3) 専門家と（子供を含む）非専門家の連携による「かゆいところに手が届く」科学教材の開発、4) 教育現場をサポートする原生生物分譲サービス、5) 専門員によるサポートが好評な自由研究支援サービス、6) 大学レベルの講義や実習に取り組める科学セミナーの開催など、教科書では影の薄い原生生物が、実は理科・環境教育にも最適な教材であることに多くの方に気付いていただく契機となる活動を展開してまいりました。原生生物との出会いによって科学の面白さに気づき、本格的な研究に取り組む原生生物大好き青少年も毎年誕生しております。

扱う生物のみならず、施設の規模、スタッフ、予算もミクロな当館が発展を続け、私自身もこの度の名誉に預かることができたのは、日本原生生物学会を始めとする全国の研究者の皆様、地域の皆様、そして歴代職員の皆様からの多大なご支援とご協力によるものであり、科学と自然を愛する小さな生物に過ぎない私 1 人の力で成し遂げるなど不可能でした。ご支援頂いた皆様に対し心から御礼を申し上げますとともに、これからも原生生物学の発展に貢献すべく何事にも全力で取り組む所存です。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末友 靖隆（岩国市ミクロ生物館）



受賞者と沼田 治 学会長（右）



子供達の「あったらいいな」を
ふんだんに盛り込んだ生物図鑑

平成 28 年度 Best Presentation Award 受賞者コメント

「キイロタマホコリカビにおける柄/胞子分化および他系統認識の進化の理論研究」

内之宮 光紀 (理化学研究所)

この度は、素晴らしい賞をいただいたことを大変光栄に思います。評価していただいた研究は数理モデルを用いた理論研究であり、原生物学会の中でも異質なものではないかと思えます。その中で賞をいただいたことは、原生物学会の懐の深さを感じるとともに、理論研究への期待もあるものと受け止めております。理論研究は、現在知られている現象や物質から、生物の機能を考える上で合理的な説明を与え、その上でパラメータを変化させた場合にどの様に機能が変化するか予測を与えることが可能です。一方で、実際に働くタンパク質や遺伝子などを発見するには実験や観察が必要です。私にとって、原生物学会は実際に生物を用いて研究をしている方々のお話をうかがうことのできる絶好の場になっております。皆様との交流を通して得た知見を活かし、今後とも賞に恥じることはない研究を続けていけるように精進いたします。



受賞者と沼田 治 学会長 (右)

「スピロストナムにおける再生」

島田 真帆 (大阪府立豊中高等学校)

私は高校での課題研究の授業で、スピロストナムに関する研究を始めました。研究を通して、自分の知らないことを明らかにしていくことの楽しさや、原生物がもつ複雑な能力などの魅力に惹かれていきました。そして、原生物の研究を専門にされている方々のお話をぜひ聞きたいと思い、今回の岡山大会で発表をさせていただきました。大会では、たくさんの方々から、スピロストナムや原生物のお話を聞かせていただきました。それだけでなく、私の研究に関するアドバイスをいただくこともできて、とても、わくわく、楽しく過ごさせていただきました。さらには、ベストプレゼンテーション賞をいただくことができて、これからももっと研究に取り組み、また発表に来たいという気持ちが強くなりました。今回、審査をしてくださった評議員の皆様、岡山大会で親身になって私の話を聞いてくださった皆さまに感謝致します。ありがとうございました。



受賞者と沼田 治 学会長 (右)

原生物学関連の学会等開催情報

15TH International Congress of Protistology (ICOP XV)

期 日 : 2017年7月30日(日)～8月4日(金)
開催地 : Prague, Czech Republic
予稿受付 : 2016年10月31日(月)～2017年4月30日(日)
早期登録 : 2017年5月31日(水)まで
大会 HP : <http://www.icop2017.org/>

第 86 回 日本寄生虫学会大会

期 日 : 2017年5月28日(日)～29日(月)
開催地 : 北海道大学(札幌市)
大会 HP : <http://www.knt.co.jp/ec/2017/jsp86/>

- 2016年10月25日 横須賀市文化会館において行われた日本微生物生態学会第31回大会において、同学会との共催で「原生生物の環境センシングと運動」と題してシンポジウムを行いました。概要は以下の通りです。上田昌宏先生（大阪大学）は細胞性粘菌を材料として三量体 Gタンパク質の制御因子としての Gip1 (G protein interacting protein 1) の同定と Gip1 の走化性の応答濃度レンジ制御に関するお話でした。稲葉一男先生（筑波大学）はハプト藻の「ハプトネマ」と呼ばれる微小管系の運動装置に関してハプトネマのコイリングと微小管の構造変化の関連について話されました。園部誠司（兵庫県立大学）はケイソウの運動機構に関与するミオシンと粘液繊維について報告しました。中垣俊之先生（北海道大学）はテトラヒメナの空間認識に関するお話をされました。洲崎敏伸先生（神戸大学）は太陽虫の餌の認識、毒物に対する反応とこれを利用した水質モニタリングに関して話されました。このシンポジウムでお目見えした原生生物種は幅広く、また内容もバラエティーに富んでおり、参加者の皆様には楽しんでいただけたのではないかと考えております。当日会場には約50名の来場があり、活発な議論が行われました。
活性化委員の野田先生、矢吹先生、島野先生にはオーガナイザーとしてご尽力いただいただけでなく、シンポジウムを要約したポスターも作成していただき、原生生物学会の宣伝活動を行っていただきました。シンポジウムの詳細は、ニューズレター No. 31号 (http://protistology.jp/journal/nl_letter/NL31.pdf) に掲載してありますのでご覧ください。
- 2017年3月23日～26日、高知大学において日本藻類学会第41回大会が行われますが、ここでワークショップ「原生生物学会出張ワークショップ：原生生物学会的藻類学研究的紹介」（3月23日（木）午後の予定）を行います。活性化委員の矢吹先生にオーガナイザーを務めていただきます。このワークショップでは藻類学会とともに日本の真核微生物に関する研究を牽引してきた日本原生生物学会に所属する若手研究者に最新の研究成果を紹介していただき、両学会のますますの繁栄と交流のきっかけにしたいと考えています。このニューズレターをご覧になっているころにはワークショップは終わっていますが、日本藻類学会のHP (http://sourui.org/annual_meeting/JSP_41st/index.html) も合わせてご覧いただければと思います。
＜追記＞ワークショップは本大会前日で雨にもかかわらず約60名の参加者が集まり、活発な議論が行われました。

日本分類学会連合 第16回総会 報告

生物多様性会議委員 島野 智之（法政大学）

会場 : 国立科学博物館上野本館講堂
日時 : 2016年1月7日（土）10:00～12:00
出席者 : 島野智之（委員）・永宗喜三郎（会計・代理出席）

【報告事項】（一部抜粋）

（報告 1）庶務（富川光）

2016年度の活動

2016年2月15日

日本学術振興会賞、国際生物学賞の推薦周知

2016年3月22日

日本学術振興会育志賞推薦依頼の周知

2016年4月25日

熊本地震に対する生物科学学会連合声明発表

2016年5月9日

加盟団体の取り組みに関するアンケート依頼

＜結果集計資料配付→追加があれば情報・意見を提供してほしい。NLに掲載予定＞

2016年6月13日

学術会議提言「国立自然史博物館設立の必要性」を加盟団体へ周知、HPへの掲載

2016年10月5日

岸本健雄氏（日本学術会議）より国立沖縄自然史博物館設立実行委員会委員として日本分類学会連合から村上哲明氏の参加要請があり、役員会で承認（10月7日）

2016年10月22日

藤原ナチュラヒストリー振興財団 神戸シンポジウム 後援

(報告 6) その他

・国立沖縄自然史博物館設立について (村上哲明委員)

連合 WG で作成した要望書の内容は学術会議の提言「国立自然史博物館提言の必要性」に取り込まれている。学術会議から内閣府・沖縄県への働きかけを進めている。

(議長) 科博と関係は？ (村上) 科博とは異なった面を打ち出す必要がある。アイデアを募りたい。(代表) 最新の情報を随時流していただきたい。

(質問) 東北と沖縄から、沖縄が選ばれた理由は？ (村上) 学術会議の提言には場所は盛り込まれていないが、災害リスク分散・東南アジアとの地理的距離・政治的状況などを考慮して沖縄に絞られたと理解している。

(質問) 沖縄のどこに作るか？ (村上) 県との相談だが、既に開発が進んだ地域が適当ではないか。

・ABS (Access and Benefit-Sharing) について (村上哲明委員)

罰則はなく「告示」のみ。国内の監視体制は緩やかなものになっている： 現地の PIC → 国際的クリアリングハウス → 日本政府に報告 → 報告 5 年後にモニタリング。国内法は緩いものであっても、分野として積極的に法令を遵守することが重要。AMED 予算で、分類学分野の手続きサポート窓口ができる可能性がある。日本の生物については制約無し。ただし 5 年後を目処に見直しがある。配付資料にある内容は日本政府の監視内容であり、別途相手国の法令遵守は必要。

(質問) 時期は？ (村上) 今年度中ではないか。正確には不明。

(質問) 過去の標本を利用した研究の場合は？ (村上) 日本では想定されていないが、何らかの配慮が必要かもしれない。

(質問) 産業利用と学術利用の差別化は？ (村上) 産業利用に関する情報はない。区別されていない可能性が高い。

(質問) 外来種研究のための販売物 DNA 研究への配慮は？ (村上) 現時点では配慮されていない。今後のパブコメで問い合わせを。

(質問) 定着した外来種を日本産とみなすのか？ (村上) 現時点では配慮されていない。今後のパブコメで問い合わせを。

(議長) 国内窓口は？ (村上) 環境省が窓口になると思われる。

(質問) 論文に ABS 準拠を表記するようになる可能性は？ (村上) あり得る。

(質問) 各国の法令を知るための方法は？ (村上) 国際クリアリングハウスが集約。国内でも環境省が支援予定。AMED 予算が通れば遺伝研 ABS チームで対応できる可能性がある。

【審議事項】 (一部抜粋)

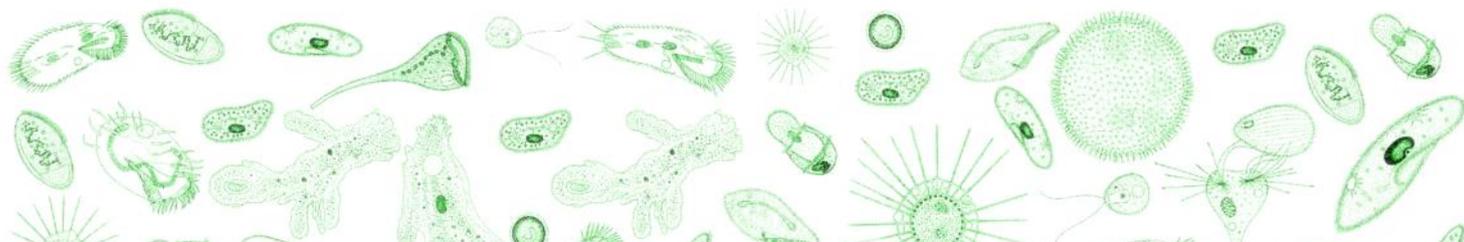
3-5) データベース

生物種数調査のアップデートに向けてアンケートを予定している。

(審議 4) 2017 年度予算

2017 年度 の 分 担 金 10,000 円 予 算 案 (一 般 会 計) (別 紙 資 料) ・ 赤 字 を 例 年 の 約 20 万 円 から 10 万 円 に 圧 縮 。

(以上、日本分類学会連合の議事録に基づいています。)



「原生生物フェスティバル 岡山 2016 & 若手の会 2016 in 岡山大会」報告 内之宮 光紀（理化学研究所）

2016年10月8日に行われた第49回日本原生生物学会の若手の会では、原生生物フェスティバルと若手の会シンポジウムを開催しました。

原生生物フェスティバルは「原生生物コロキウム」「微生物フェスティバル」など名前を変えながら、関西地方を拠点に催されてきたイベントです。

今回は若手の会シンポジウムと同時開催ということで、若手の会一丸となり準備を進めました。

『原生生物フェスティバル 岡山 2016』

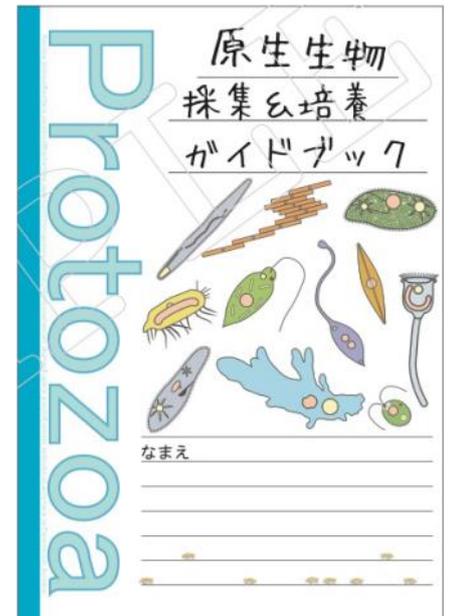
今回の原生生物フェスティバルは2部構成になっており、前半は原生生物の観察会・細胞株の譲渡会、後半は早川 昌志さん（Life is small Project）・島田 真帆さん（大阪府立豊中高等学校）を講師に迎え、スマホ顕微鏡ワークショップを開催しました。

観察会・譲渡会では多くの先生方や研究室にご協力いただき、多数の生物の展示を行うことができました。来場者の反応は様々で、黙々と顕微鏡を覗いている方もいれば、スタッフと熱心に語り合う方もおり十人十色の楽しみ方をされているようでした。私自身もボルボックスの光走性の速さには大変驚きました。株の譲渡は来場者の方からも特に好評で、ずっと欲しかった生物を手にすることができた、などの感想をいただきました。一方で、展示している生物についての解説がもっと欲しいという要望もあり、今後の改善点としたいと思います。

また、実際の生物の展示に加えて、原生生物採集&培養ガイドブックなど、原生生物に親んでもらうためのグッズも用意しました。ガイドブックは、研究者の方々に今回のために書いていただいたものです。簡単に実践できる原生生物の採取・培養方法や、いくつかの生物についての解説が掲載されており、原生生物に興味を持つ人の裾野を広げるための一助になると考えております。

スマホ顕微鏡ワークショップでは、早川さん・島田さんにレクチャーのもと、個人でも購入可能な材料を用いてのスマホ顕微鏡の作製と作製したスマホ顕微鏡を使った原生生物の観察を行いました。原生生物が肉眼で見えないことは原生生物を知る一つのハードルだと思います。もし、自身で手軽に顕微鏡を作製することができるになれば、人々が原生生物に触れるハードルを下げることができます。ワークショップを通して、手軽に作れるスマホ顕微鏡のことを知っていただくことは、原生生物への理解を広める上で大変有意義なことです。参加者の方々も、自分の手で作った顕微鏡で生物を観察できると、手軽に観察できることに驚きと喜びを感じていただいていたように思います。

市民と研究者が交流することは、研究の意義やおもしろさを社会全体に知ってもらうために非常に重要です。原生生物の持つ魅力を多くの方に知っていただけるように、今後も努力したいと思います。



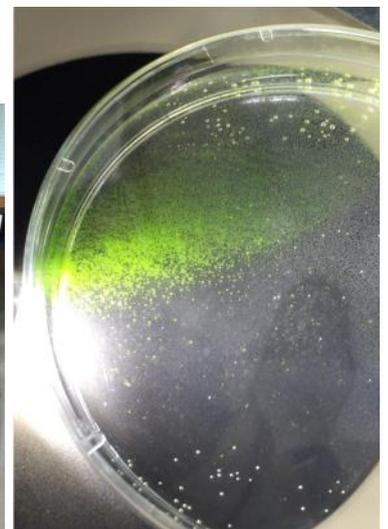
ガイドブック表紙



観察会の様子



スマホ顕微鏡ワークショップの様子



ボルボックスの走光性の観察

- 原生生物フェスティバル公式ホームページ：<https://sites.google.com/site/wjproto/>
- 原生生物フェスティバル 岡山 2016 世話人・スタッフ(順不同)：内之宮光紀(理化学研究所)，池田理佐(岡山大学)，早川昌志(Life is small Project)，末友靖隆(岩国市ミクロ生物館)，桐間惇也(兵庫県立大学)，小林真弓(神戸大学)，柴田あいか(立命館大学)，樋口里樹(神戸大学)，梁瀬隆二(兵庫県立大学)，洲崎敏伸(神戸大学)，安藤元紀(岡山大学)
- スマホ顕微鏡ワークショップ講師：早川昌志(Life is small Project)，島田真帆(大阪府立豊中高等学校)

『若手の会シンポジウム 2016 in 岡山大会「原生生物のフシギ」』

若手の会シンポジウムは、原生生物フェスティバルの後ということもあり、学会員以外の方にも来場いただけるようにし、「原生生物のフシギ」と題して、原生生物を通して見たときに広がる不思議な世界を感じてもらうことを目的としました。

今回のシンポジウムでは、鹿毛 あずささん(東北大学大学院)，笠田 実さん(東京大学大学院)，柏山 祐一郎さん(福井工業大学)に講演をしていただきました。

鹿毛さんには、クラミドモナスの重力走性についてお話をさせていただきました。クラミドモナス自体は既に有名な生物ですが、生物流体力学やアクティブマターなどの物理学との関連、重力生物学という新しい研究分野への貢献など原生生物の秘められた可能性を示していただいたように思います。遺伝子操作による力学的な仮説の検証や、生物の観察によって理論からは予想されていない現象が発見されたことなどは、原生生物を使った実験が分野を超えて活用できることを感じました。

笠田さんには、実験室での個体群動態と進化を結びつける研究についてご講演いただきました。個体群動態や進化の研究には、複数の世代を観察する必要がある、個体数の把握が難しいなどの困難が付き纏います。原生生物はこれらの困難を克服することができる魅力的な研究材料であることを紹介していただきました。異なる形質間のトレードオフは、進化を議論する際にしばしば検証すべき課題として上がりますが、クロレラの進化を通して明快に示していただきました。

柏山さんには、原生生物が光毒性をどのように克服しているかをお話いただきました。クロロフィルは光合成に必要な色素である一方で光毒性を持ちます。クロロフィルを無毒化することで、原生生物は光合成生物を捕食したり、葉緑体を獲得できたというお話は、光毒性の克服が生物の進化に非常に大きな役割を持っていたことを示しています。また、光毒性の解毒が多く分類群で保持されていることを考えると、原生生物のもつ本質的な性質に関わっているようにも感じました。

原生生物を通して重力、進化、光毒性を考えることで、それらが生物に与えている影響の大きさを改めて実感させられたように思います。ご講演いただきました、鹿毛 あずささん、笠田 実さん、柏山 祐一郎さんに深く感謝を申し上げます。

原生生物フェスティバルおよび若手の会シンポジウムの開催にご協力いただいた、大会長の安藤 元紀 先生、実行委員の先生方、展示用の生物をご提供いただいた研究室の皆様、グッズの作成・展示にご協力いただいた皆様、スタッフの皆様、そして会場にお越しいただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

原生動物園 Vol. 1 ~ 3 Web にて公開中!

「原生動物園」は若手の会が発行を行っている Web 科学雑誌です。原生生物研究者の声や原生生物の魅力、知識などをたくさんの方の原生生物たちの写真とともに紹介しています。

原生動物園は若手の会ホームページにて公開していますので、どうぞご覧ください。

原生動物園ホームページ (<https://sites.google.com/site/protozoogarden/>)

若手の会へご意見、ご要望をお寄せ下さい

日本原生生物学会若手の会では、若手研究者の皆様のご意見を必要としています。若手を中心にこんなことをしたら面白い、こんな企画をぜひ行いたいなどのご意見、ご要望をどしどしお寄せ下さい。また、若手の会役員も随時募集しています。興味のある方は内之宮 <kouki.uchinomiya@riken.jp> までご連絡下さい。

若手の会ホームページ

<https://sites.google.com/site/youngprotistologists/>

2017 年度 若手の会役員 (2017 年 2 月現在)

会長	内之宮 光紀 (理化学研究所)
副会長	池田 理佐 (岡山大学大学院)
会計	樋口 里樹 (神戸大学大学院)
編集長	早川 昌志 (Life is small project)
HP 担当	梁瀬 隆二 (兵庫県立大学大学院)
役員	末友 靖隆 (ミクロ生物館)
役員	桐間 惇也 (兵庫県立大学大学院)
役員	小林 真弓 (神戸大学大学院)
役員	柴田 あいか (立命館大学大学院)

事務局からのお知らせ

庶務 細谷 浩史（神奈川大学）・庶務補佐 北出 理（茨城大学）

- (1) 「入会申込書」，原生動物学雑誌へ投稿された論文の図表の「転載許可願い」など，各種書類が学会ウェブページ (<http://protistology.jp/index.html>) からダウンロード可能になりました。
- (2) 日本寄生虫学会と本学会の連携を深める事を目的として，両学会が共同でサテライトミーティング（世話人は永宗 会員）を開催する事になりました。本ミーティングは，毎年寄生虫学会大会前日に定期的に開催される予定です。
- (3) 国際委員と ACP 国際委員を統合し，「国際委員」とすることに致しました。八木田・春本両会員に委員を委嘱いたしました。
- (4) 国際学会への若手会員の参加援助として，15th International Congress of Protistology (ICOP XV, 2017 年 7 月 30 日 - 8 月 4 日 チェコ・プラハ) を助成対象とすることと致しました。募集の詳細は学会ウェブページへ掲載されます。

編集委員会からのお知らせ

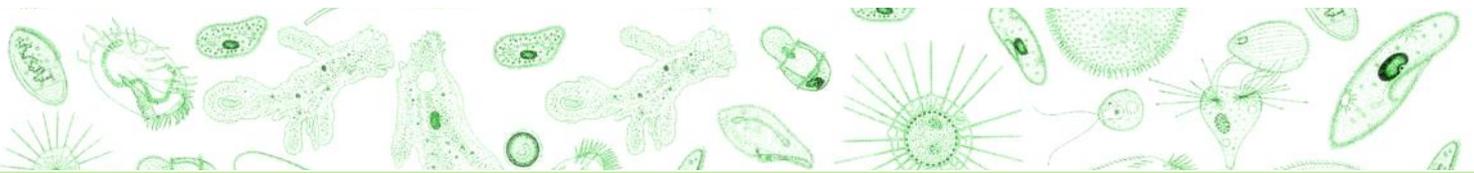
編集長 廣野 雅文（法政大学）

皆様，原生動物学雑誌第 49 巻はもうご覧になりましたか？原著論文，総説，特別寄稿が掲載されており，たいへん充実した内容です。ぜひご一読下さい。

さて，かねてからのお知らせの通り，昨年，原生動物学雑誌（Japanese Journal of Protozoology）が電子ジャーナル化されました。これは編集委員会が数年前から進めている雑誌大改革の第一弾です。そして今年は第二弾が始動します。その内容は，原生動物学雑誌を「Journal of Protistology」という英文専用誌に，このニューズレターを「原生生物」という和文誌に改編するというものです。前者は国際的な電子ジャーナル，後者は和文総説などの掲載とともに学会機関誌としての役割を担うものとお考え下さい。

改革の方針は決まったのですが，これから詳細を決めていかななくてはなりません。次回の総会で最終的な形をお示しできるように，編集委員会でこれから議論を重ねる予定です。もし，「新しい雑誌はこうあるべき」というご意見がありましたら，編集委員会（廣野）宛に遠慮なくご連絡下さい。

最後に論文投稿のお願いです。編集委員会では常に皆様からの論文，特に原著論文の投稿をお待ちしています。繰り返になりますが，原生動物学雑誌は電子ジャーナル化されており，掲載された論文にはそれぞれデジタルオブジェクト識別子（DOI）が付与されます。これにより，引用が容易になり，雑誌の発信力は大きく高まりました。さらに，オープンアクセス誌は高額な掲載料がかかる場合が多いですが原生動物学雑誌は無料です。当雑誌へのご投稿をぜひご検討下さい。



編集・刊行 日本原生生物学会 編集事務局

〒184-8584 東京都小金井市梶野町 3-7-2

法政大学 生命科学部 生命機能学科

日本原生生物学会 編集事務局（編集長：廣野 雅文）

Tel : 042-387-6132 Fax : 042-387-7002

E-mail : hirono@hosei.ac.jp

ニューズレター担当 道羅 英夫（静岡大学）
西山 学即（福島県立医科大学）

Protistology Newsletter 32 号は学会ウェブページからもダウンロードできます。非会員の方への宣伝等にぜひご活用ください。

http://protistology.jp/journal/nl_letter/NL32.pdf